

グローニンゲン事務所開所式と共同シンポジウム



金谷 茂 則*

Opening Ceremony for Osaka University Office in Groningen
and Collaboration SymposiumKey Words : Osaka University Office in Groningen, Opening Ceremony,
Collaboration Symposium, University of Groningen

はじめに

大阪大学グローニンゲン事務所開所式と、引き続き開催された大阪大学-グローニンゲン大学共同シンポジウムに出席するために、平成17年10月23日(日)から26日(水)までオランダのグローニンゲンを訪れた。グローニンゲンはフローニンゲンと表記する場合もあるが、グローニンゲン州の州都で、アムステルダムの北東約200Kmに位置するオランダ北部最大の都市である(写真1)。と言っても人口は17万人で、10人に一人以上は学生という大学の街である。グローニンゲンに行くためには、近くに空港がないのでアムステルダム(スキポール空港)から電車を利用する。通常は直通の特急があり2時間ほどで着く。ただ、あいにくこの時は直通電車がなく、途中で乗り換える必要があったため約3時間を要した。電車からの眺めで印象に残ったのは緑の広い草原と畑、そしてたくさんの牛。この国の乳製品、特にチーズの主要な輸出先は日本とのこと。まだ紅葉には少し早かったが、木々が色づけばさぞかしい美しいだろうと思われた。

余談になるが、日本同様オランダでも電車は最も



写真1 オランダ地図

便利な交通手段で、その連絡網はよく整備されている。しかしそのシステムは複雑で海外からの旅行者にはなかなかわかりにくい。アムステルダムのような大きな駅になると、同じホームの前方、中程、後方からそれぞれ別の電車が発車する。しかも、それぞれすべての車両が同一目的地に向かうわけではなく、途中で車両の一部が切り離されたり連結されたりすることがある。従って、目的地に向かう車両が途中で連結された場合、連結された後でその車両に移動しなければならない。移動しないと、違う場所に連れていかれてしまう。そのような目に遭わないためには、誰かに聞いて教えてもらうしかない。私達旅行者には駅の案内を見てもわからない。幸いオランダ人はたいてい英語を話せるのでコミュニケーションには不自由しない。ただし、駅員や駅の案内で聞くのが必ずしも最良とは言えない。彼らはおもむろに電子手帳みたいなものを取りだしペンでついて時刻表を調べてくれるのだが、結構時間がかか



* Shigenori KANAYA
1950年1月生
1979年東北大学・大学院理学研究科化学
第二専攻博士課程修了
現在、大阪大学大学院工学研究科生命先端工学専攻、教授、博士(理学)、蛋白質科学
TEL 06-6879-7938
FAX 06-6879-7938
E-mail : kanaya@mls.eng.osaka-u.ac.jp

る。また必ずしも正しい情報を与えてくれるとは限らない。結局、一番いいのは乗客に聞いてみることである。

さて、グローニンゲン駅はホームが10近くある比較的大きな駅である。しかし、すべての路線の始点、終点になっているので、地下道や歩道橋はない。どのホームからも階段を昇り降りすることなく駅の外に出られる。グローニンゲン駅から旧市街へは歩いても行けるが通常はバスを利用する。旧市街は四方を運河で囲まれている。駅から北へ少し行くと運河を渡って旧市街に入る。旧市街の街並は新旧入り混じっているが静かで落ち着いた佇まいである。旧市街の中心部には市役所があり、その近くには街のシンボルであるMartinikertorenがそびえている。宿泊したホテル(Hotel de Vries)は市役所前広場から徒歩で2-3分のところにある。ロビーでは暖炉の火が赤々と燃えていて、旅行者を暖かく迎えてくれる。今回、総長はじめ多くの阪大関係者がこのホテルを利用した。

グローニンゲン事務所の設立を記念する開所式は、1900年代初頭に建築されたグローニンゲン大学本部棟(写真2, 3)において10月23日に執り行われた。本事務所は、アメリカのサンフランシスコ事務所とならび、大阪大学の主要な海外拠点の1つと位置付けられている。ちなみに、グローニンゲン大学は1614年創立のオランダでは2番目に古い歴史のある大学で、10学部から成り、学生総数は1万9千人に達する。学部数、学生総数ともに大阪大学とほぼ同じ規模である。開所式は、宮原総長の挨拶に始まり、グローニンゲン大学のKuipers学長、小町駐オランダ大使、そしてグローニンゲン市のvan Schie副市長の挨拶と続いた。その後、大阪大学とグローニンゲン大学の文系、理系の教授による基調講演があり、厳粛ではあるが友好的な雰囲気の中で終了した。基調講演では、大阪大学からは生命機能研究科柳田俊雄教授が現在推進されている1分子過程プロジェクトおよびソフトナノマシンプロジェクトの最新の研究成果について、また文学研究科柏木隆雄教授が日本はどのようにしてオランダから医学や科学を学んだのかについて講演された。また、グローニンゲン大学からは理学部Feringa教授が分子モーターに関する最新の研究成果について、また日本研究センターSegers教授がオランダと日本の深い関わりについて



写真2 グローニンゲン大学本部棟(グローニンゲン大学HPより)

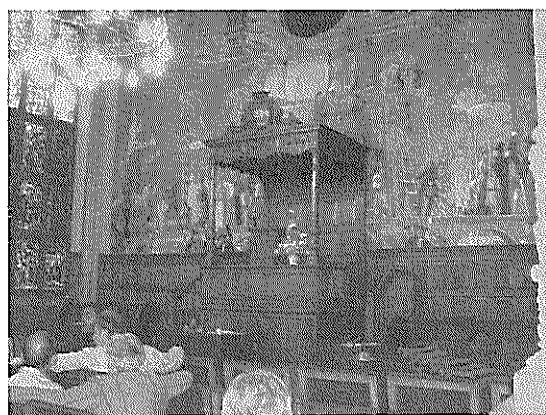


写真3 開所式会場(大阪大学グローニンゲン事務所HPより)

講演された。その後のバンケットでは、両国の研究者や大学関係者が入り混じって一つのテーブルを囲みお互いの親睦を深めた。

大阪大学-グローニンゲン大学共同シンポジウムは、10月25日および26日にグローニンゲン市内で開催された。本シンポジウムの趣旨は、両大学間の学生や研究者の交流および共同研究の実現をめざして、両大学の研究者がそれぞれの研究内容を紹介し意見交換する場を提供することである。そのために、双方から人文科学系、自然科学系(理工系)、医学系の3分野の研究者が分野ごとに10名ずつ参加してそれぞれ異なる会場で研究発表と討論を行った。筆者はバイオ系ではあるが工学研究科所属ということで理工系のシンポジウムに参加した。他には、工学研究科から馬越祐吉教授、福住俊一教授、理学研究科から原田明教授、久野良孝教授、常深博教授、基礎工学研究科から伊藤正教授、真島和志教授、産業科学

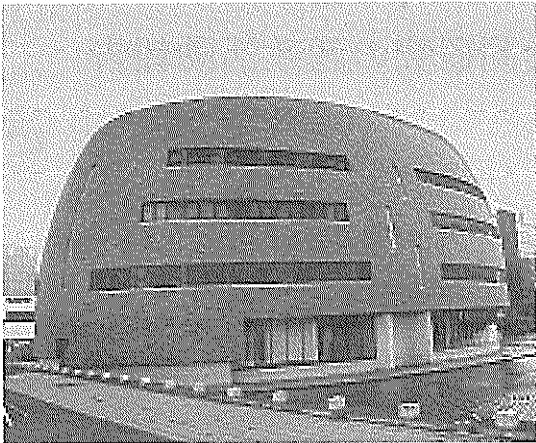


写真4 理工系シンポジウム会場（グローニンゲン大学HPより）

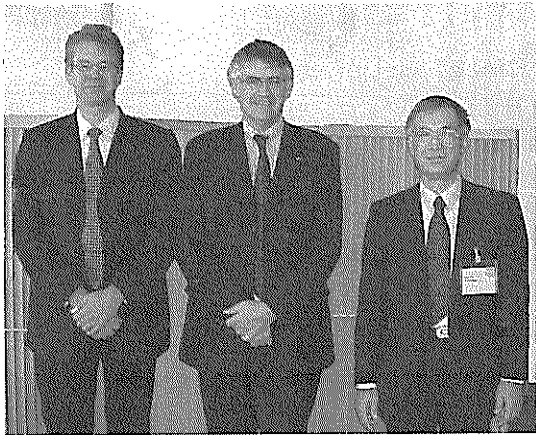


写真5 左からJanssen教授、Dijkhuizen教授、筆者

研究所から田畑仁教授、核物理研究センターから土岐博教授が参加した。グローニンゲン大学からは、B.Hessen, J. de Hosson, H.Woertche, J.Knoester, B van Wees, T.Broekhuis, T.van der Hulst, P. Barthel, D. Janssen, L. Dijkhuizen 各教授が参加した。シンポジウムは、旧市街からバスで20分ほど北にある自然科学系のキャンパス内の情報工学センター（写真4）で行われた。発表内容は、素粒子・原子核から物性物理、ナノテク、高分子化学、バイオまで多岐に亘った。バイオ関連はJanssen教授とDijkhuizen教授の2名で、研究分野（微生物、酵素の産業利用）が筆者と近いことから、シンポジウムの後で意見交換を行った（写真5）。両教授ともグローニンゲン生物分子科学・バイオテクノロジー研究所（GBB）の所属で、学生の受け入れ、派遣いずれにも大変前向き

であったので、今後、大阪大学とGBBの間で活発な交流のなされることが期待される。なお、各参加者の講演題目は大阪大学グローニンゲン事務所のホームページ(<http://www.osaka-u-groningen.org/>)に掲載されている。ちなみに、人文科学系の大阪大学側参加者は、文学研究科の秋田茂教授、竹中亨教授、人間科学研究科のW. Schwentker教授、言語文化研究科のヨコタ村上孝之教授、法学研究科の竹中浩教授、長田真里教授、国際公共政策研究科の栗栖薫子教授、経済学研究科の阿部武司教授、浅田孝幸教授、社会経済研究所の小川一夫教授、また医学系は、医学系研究科の狩野方伸教授、辻本賀英教授、生命機能研究科の花岡文雄教授、米田悦啓教授、歯学研究科の豊澤悟教授、古郷幹彦教授、村上伸也教授、薬学研究科の土井健史教授、宇野公之教授、産業科学研究所の山口明人教授である。

グローニンゲン大学との交流が盛んになると多くの教職員や学生がグローニンゲンを訪れる機会も増えると思われる。そのグローニンゲンへの起点となるアムステルダムは世界中の人々が訪れる観光の名所である。そういった都会では人はみな注意深くあらねばならない。たとえば、タクシーが信用できないのは観光地であればどこでも同じであるが、旅行案内所で乗らないように勧められるほどに悪質なタクシーには決して乗るべからず、また、背中に汚物をかけられたとしてもそれを拭こうとして決して上着を脱いだりしてはいけない。なぜなら、そうしている間に大切な手荷物が消えてしまうことにもなりかねない。今回開所式に出席した阪大教授の中にもこのような手口で危うく手荷物を盗まれそうになった人がいる。国際交流が盛んになり海外旅行の機会が増えるのはいいことである。しかし、このような被害に遭わないよう十二分にご注意あれ。

最後に、開所式の開催にあたって尽力されたグローニンゲン事務所の地石雅彦氏ならびに本学国際交流課の方々、そしてシンポジウムの開催にご尽力頂いた核物理研究センターの土岐博教授ならびに藤原守助教授、さらには今回の海外出張で大変お世話になった工学研究科国際交流室室長辻穀一郎教授ならびに同室員福井希一教授にこの場をお借りして篤く御礼申し上げたい。